

JICA草の根技術協力事業とカンボジア保健科学大学との国際交流Ⅱ

～カンダルスタン郡の行政官・リーダー小学校教員の

来日研修後セミナーとカンボジア保健科学大学との共同事業～

野村 美加¹, 清水 裕子², 徳田 雅明³, 山口 舞², 楠川 富子^{2,4}

¹香川大学農学部, ²香川大学医学部, ³香川大学インターナショナルオフィス,
⁴NGO ウドンハウス

Report of JICA Partnership Program and Visiting to the
University of Health Sciences in Cambodia II

- Post-Training Seminar for Primary School Teachers of Kandal Stueng District and
International Cooperation with the University of Health Sciences, Cambodia -
Mika NOMURA¹, Hiroko SHIMIZU², Masaaki TOKUDA³, Mai YAMAGUCHI²,
Tomiko KUSUGAWA^{2,4}

¹Faculty of Agriculture, Kagawa University, ²Faculty of Medicine, Kagawa University,
³International Office, Kagawa University, ⁴NGO UDON House, Cambodia

要 旨

2017年にJICA草の根事業に採択され、カンボジア国カンダルスタン郡現地小学校にて日本型保健室を中心とする学校保健体制作りを実施している。2017年10月にはカンダルスタン郡行政官と小学校教員24名を対象に来日研修を実施し、帰国後はフォローアップのための来日後研修を継続的に行っている。本稿では、2018年6月に実施した来日研修後セミナーとその成果について報告する。また、教育省長官がリーダー校のバクー小学校を視察され、パソコンが褒賞されることになった経緯や、香川大学で作成している保健テキストがカンボジアの副読本として認められることになった経緯についても報告する。最後に、2018年のカンボジア保健科学大学との交流状況について紹介する。

キーワード：カンボジア、学校保健研修、小学校教員、カンボジア保健科学大学、国際交流

I はじめに

カンボジアにおけるJICA草の根技術協力事業地域特別支援枠として、カンボジア国「カンダルスタン郡の衛生教育改善のための学校保健体制の構築プロジェクト」（プロジェクトマネージャー、医学部清水裕子教授）が2017年から3年間採択された。本事業は、学校保健モデルを通じて学校保健指導者を育成し、カンダルスタン郡小学校全校で衛生教育向上活動する学校保健衛生モデル（保健室設置）を構築することを目的としている。本事業の概略、現地開講式については、2017年香川大学インターナショナルオフィスジャーナル第9号（29-40頁）にて報告したが、カンダルスタン郡全32の小

学校を5ブロックに分け、その中から保健指導をリードする小学校（リーダー校）9校を設定し、2017年10月にはカンダルスタン郡行政官とリーダー校の小学校教員24名を招聘し来日研修を行った。本事業はカンボジア教育・青年・スポーツ省（以下、教育省）も協働しており、教員の来日研修にあわせ教育省長官らも視察され研修者への激励も行われた。来日研修者帰国後は、フォローアップとして「来日研修後セミナー」を計画し、これまでに何度か行った。

本稿では、その一環として来日研修者が得た知識を広く共有するために来日できなかった教員のための2018年6月に実施した公開研修のトライアルについて報告する。また来日した研修者のフォローアップのための来日研修後セミナーについても報告する。ついでカンダルスタン郡リーダー校の一つであるバクー小学校が教育省長官からパソコンを褒賞されることになった経緯について説明する。最後に、2018年カンボジア保健科学大学との交流状況について報告する。カンボジア保健科学大学はカンボジアで最も古い医学系の大学であり、2017年、表敬訪問し香川大学とカンボジア保健科学大学双方の大学紹介を行った（香川大学インターナショナルオフィスジャーナル第9号）。本稿ではその後の交流経過についても報告する。

Ⅱ 来日研修者の公開研修トライアル及び来日研修後セミナー

Ⅱ-1 公開研修トライアル（2018年6月7日）

2017年カンダルスタン郡小学校9校をリーダー校とし、その教員および行政官計24名に対し来日研修後セミナーを行った。来日研修の事業内容を広く公開し情報を共有するために来日研修者は、研修を受けていない教員のために公開研修を計画した。2018年6月にはバクー小学校（プロジェクト呼称No.5）とチャンクブ小学校（同No.8）の来日研修教員が中心となり公開研修のトライアルを実施した。対象者はバクー小学校およびチャンクブ小学校の所属する州行政区分傘下の小学校教員であり、講師は来日研修をうけた両校長である。本トライアルのサポートは香川大学清水プロジェクトマネージャー、山口現地調整員、野村（教授）、受託先現地NGOウドンハウス（以下、ウドンハウス）スタッフが行った。

公開研修トライアルは6月7日午前、バクー小学校（No.5）で実施した。当校は、来日研修後校内のクリーン化に取り組み、来日後に最も学校保健環境を確保している学校である。香川大学、ウドンハウススタッフがバクー小学校へ向かうと、校長が8月で退職することもあり、教育省大臣から長期功労表彰を受賞したという知らせを聞きお祝いの言葉を伝え賑やかな雰囲気の中、準備を進めた。公開研修には約20名の参加者が集い9時に開始した。まず、校長が来日研修内容についてスライドを用いて説明を行った。その後質疑応答、保健室、手洗い、トイレの見学を実施した。校長の発表内容を聞いていると来日研修ではゴミの分別や水の精製に関することが印象深かったことがうかがえる。また、清水プロジェクトマネージャーへウドンハウス提供の手洗い場と同じものを作ってほしいとの意見があったが、教員の行動・態度は教育そのものであることを理解の上、工夫を重ねる方向を模索してほしいと自助努力について促した（図1, 2）。



図1. バクー小学校 (No5) における公開研修トライアル

(A) カンダルスタン州局長による開会の挨拶, (B) 清水プロジェクトマネージャーの挨拶, (C) バクー校長による公開研修, (D) 参加者 (バクー小学校近郊の小学校教員), (E) バクー校長による来日研修の説明



図2. バクー小学校 (No. 5) における公開研修トライアル

(A) 保健室, (B) 手作りの水道, (C) 手作りの幅跳びグラウンド, (D) 保健室, (E) トイレ, (F) 集合写真

午後は、チャンクブ小学校 (No. 8) へ移動した (図3)。バクー小学校同様、チャンクブ小学校校長がその同州行政区分傘下小学校教員に対し、公開研修トライアルを実施した。当小学校は、寺院 (パゴタ) の境内にあり、落ち着いた環境である。まず校長によるスライドを用いた来日研修内容の説明を行いその後、保健室、手作り手洗い場、井戸見学を行った。質疑応答は、校長の来日研修で経験した実感に満ちた説得と参加者の協調が印象的なミーティングであった。

両校の校長に共通して、お金がなくても工夫で何かできるはずだと皆に説得していたこと、保健室の設置は簡単だということ、ごみの分別やごみ焼却が重要だということなど、地に足のついたコミュニケーションができるよいトライアルであったと感じた。

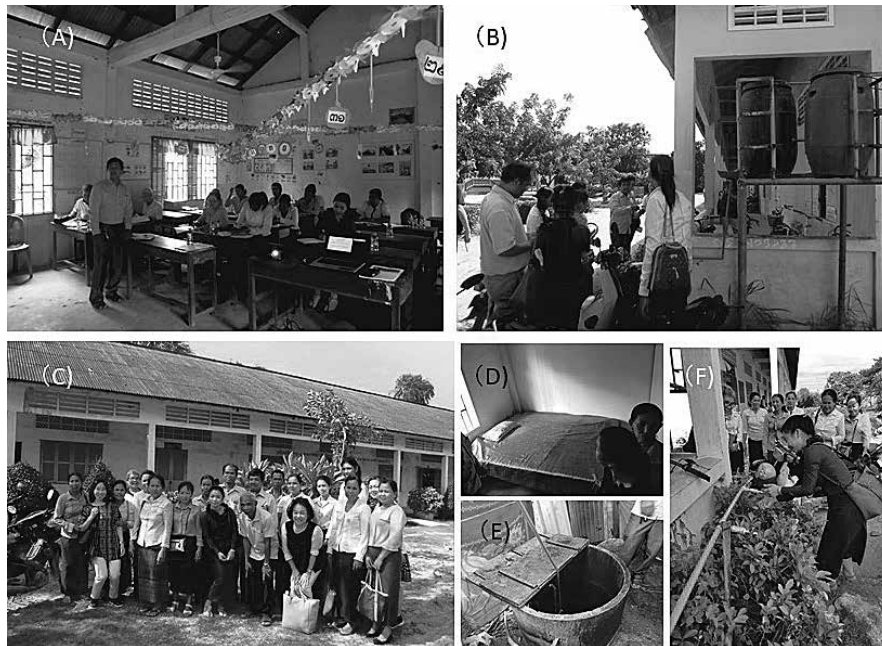


図3. チャンクブ小学校 (No. 8) による公開研修トライアル

(A) チャンクブ小学校校長による公開研修, (B) 手作り水道の視察, (C) 集合写真, (D) 保健室ベット, (E) 水源となっている井戸水, 僧侶のシャワー水としても使用しているため蓋を閉じることができない, (F) 手作り水道で手洗い

II-2 来日研修者対象の来日事後研修セミナー

2018年6月9日(土) 13:00-17:00バクー小学校にて来日研修後セミナーを行った(図4)。本セミナーはII-1の公開セミナーとは異なり、来日研修者のフォローアップを目的としている。対象者は本プロジェクトのリーダーとなる来日研修者であり、当日は、行政担当者として教育省学校保健局スラッド・チェンダ副部長、カンダルスタン州からはサン・ミエン学校保健局長、郡教育事務所局長・副局長の2名、リーダー校の小学校教員12名が参加した。また来日していないが既に保健室に常駐している保健担当教員3名も参加し計19名が参加した。研修の進行、日本語訳はウドンハウススタッフにより行われた。香川大学からは清水プロジェクトマネージャー、山口現地調整員、野村(教授)が参加した。研修内容は、来日研修生のニーズ調査に基づき決定しているが、日本型保健室活動をカンボジア型に改編を試みるものとして、講義と演習を実施した。同様の来日研修者のフォローアップ研修は2018年3月にも実施しており、その時には「保健室作り」「救急箱の管理」「けがの手当」の実技指導を行った。本稿では、6月7日実施の保健室業務の理解を目的とした「自律神経失調症等の理解」「包帯法実習」について報告する。本研修前後にはアンケートを行い、理解度を評価した。

セミナーではまず、ウドンハウス楠川氏から冒頭の挨拶が行われ、その後、学校保健局スラッド・チェンダ副部長から、教育省の方針について説明された。次に来日研修教員のそれぞれの小学校の進捗状況についてウドンハウスのブン氏からパワーポイントを用いて説明された。その後、清水プロジェクトマネージャーから「倒れる児童」の理由について、発達の観点からの説明が行われた。しかし通訳が「自律神経失調症」などの専門用語がわからず、現象的な説明になってしまった点は今後改善していく必要があると感じた。また、「児童が倒れる」という事例は既に現地小学校(バクー小学校)では発生しているが、まだ他の学校での発生報告はないことが判明した。この事象は日本では保健室の課題として重視されているが、カンボジアでは児童の発達や健康に関する知識不足のため、児童に生じている問題への認識が十分ではない可能性が考えられた。本セミナーで新たな知識が事前に得られたことは今後の予防と対応につながるものと思われる。その後、教員が自らBMI (Body Mass

Index) の 計算方法を学習した。すでに教育省で分数計算方法について学習をしていたので理解度は高いと感じた。次回は復習を行うと共に、児童の個人カード作成やMBI チャートを入れることも計画している。最後に清水プロジェクトマネージャーによるデモンストレーションと研修者による演習：①包帯のまとめ方、②包帯法 巻軸帯、折転帯、③消毒のポイント：イソジンをういた消毒法、オープン・クローズ創傷管理法、創傷洗浄法、血液由来感染予防（エイズ、肝炎）、氷嚢の活用法について行われた。研修者が何度も包帯を自分の腕や足で練習していたのが印象的であった。最後は、スラッド・チェンダ氏、サン・ミエン氏から閉会の挨拶が行われセミナーが終了した。



図4. 来日研修者を対象とした研修セミナー

(A)学校保健局スラッド・チェンダ副局長による開会の挨拶、(B)ウドンハウススタッフによる来日研修教員のそれぞれの小学校の進捗状況の説明、(C)セミナーに参加した来日研修者、(D)清水プロジェクトマネージャーによるデモンストレーション、(E)清水プロジェクトマネージャーからの「倒れる児童」の説明、(F)修了書授与

II-3 カンボジア行政・小学校教員への学校保健研修の評価

本来日研修後セミナーの開催前後には、研修参加者19名に対し自記式質問紙を実施した。参加者の年齢は24～62歳であった。質問項目の内、保健室の整備状況は5項目3件法で「できた」「見通しがある」「ない」、けがの手当では9項目3件法「できた」「だいたいできた」「できない」で何れも1-3得点を付与した。手洗い関連4項目、保健室関連5項目、公開研修準備1項目計10項目4件法で「全くそうではない」「だいたいそうではない」「だいたいそうである」「全くそうである」のリッカート尺度とし、1-4の得点を付与した。アンケートは研修前と後に行い、分析はWilcoxon の符号付き順位検定を用いた。データは現地NGOによりクメール語で実施され、実施後に匿名で分析者に報告された。その結果、保健室の整備状況は、保健室のベッドや物品、担当者、救急箱、記録は概ねでき、機関連携は未整備であった。見学したけがの手当では「できない」の回答はなかった。研修内容は、5つの項目で前後に有意差があった。「手洗い手順を説明できる」(代表値 前3.47 後3.90, <0.01)、「トイレ使用後の水を流す理由を説明できる」(代表値 前3.42 後3.79, <0.05)「保健室の人・物・衛生管理を理解した」(代表値 前3.16 後3.53, <0.01)「児童の倒れる理由を説明できる」(代表値 前2.26 後3.26, <0.01)「けがの手当の手順を説明できる」(代表値 前2.53 後3.05, <0.001)であった。

今回の研修により保健室内は、必要物品が揃いハード面での整備が整いつつあるため、保健室を適

切に運営用するための研修を検討する必要性が急務であると感じた。また、けがの手当は、説明はできるとの回答があるものの、研修参加者の実技評価を行うためのフォローアップの必要性も感じた。自律神経失調症等を主体とする倒れる児童の理解は、小学校・中学校では重要な保健課題であり、今回の研修による講義で新たな知識が得られたものと考えられる。本アンケート調査により児童の自律神経失調症の理解は今回の研修により効果があったことが判明した。今後は、保健室の経営研修、けがの手当での実技指導と実地指導について予定している。

Ⅲ 教育省長官のバクー小学校視察

6月8日H.E.キム・セタニー長官がバクー小学校を視察された（図5）。尚、本視察内容は終了後直ちに教育省のFacebookに掲載された。

https://m.facebook.com/media/set/?set=a.2230936300266305.1073744669.2102796489986_57&type=3

バクー小学校では、長官の挨拶の後、清水プロジェクトマネージャーからの挨拶の後、校長から当校での実施内容について説明された。その後 校内を視察し、写真撮影を行い終了した。同行した学校保健局副部長チェンダ氏によれば、長官は、校門を入ったところで、ごみひとつない珍しい状況を見て、これは何かプレゼントしなければならないと発言されたとのことであった。ミーティングでの挨拶でもごみひとつない校内が田舎の学校で実現できていることをほめておられた。すでにこのような校内クリーン作戦は、各州で実施しており、他の州にモデル校 ができているとのことであった。これは、教育省が保健政策を他の団体と協力して実施していくという大臣方針の下、①児童、先生、地域住民の健康について保健室を中心に進めていくこと、②感染症について対策を講じること、③校内クリーン作戦、を実施している流れに即しているとのことであった。教育省は、2030年（開発途上国におけるミレニアム開発目標）までに全国の学校すべてに保健室を作る計画であることを説明された。カンダルスタン郡で香川大学が先進的に知識を与えてくれるので、頑張ってもらいたいと激励された。教員には、自分に何ができるかを判断し、必要な知識を身に付けてほしいと助言された。長官は非常に綺麗に清掃されていた校内を視察し、パソコン21台を褒賞として贈ることを決定した。ただ、パソコンのために、ほこりのない教室設備が求められ、つまり現在の木の窓ではなく、ガラス窓をいれる必要がでてきた。その机やイスも準備しなさいと言われ、大きな課題が課されることとなった。しかも選挙前の7月29日（およそ1か月後）の期限が切られた。パソコンの書類は、直ちに郡から出すよう指示され、その場に参加していた教育事務所所長は、すぐに事務所に帰り、次の日のセミナーも欠席して、昼までに書類を作成しなければならず手続きに奔走される様子がうかがわれた。また、長官は、教育省では、全国の学校から優秀学校を表彰しているのだから、バクー小学校も表彰を受けられるように申請を出すよう指示された。しかし、そのためには、体育、音楽、保健、芸術など多方面にわたる工夫が必要であり、6年間に6回申請してやっと表彰を受けた学校もあると激励された。



図5. M.E.キム・セタニー長官のバクー小学校（No5）視察

(A)H.E.キム・セタニー長官との面談，(B)保健室視察，(C)授業室視察，(D)グラウンドでの説明，(E)集合写真，
(F)パソコンが設置されると推測される教室，(G)バクー小学校

IV 教育省キム・セタニー長官執務室訪問

6月6日午後3時からH.E.キム・セタニー長官執務室を訪問した（図6）。訪問者は、ソテアビー局長、ティッティダ副部長、学校保健局スタッフ2名、清水プロジェクトマネージャー、山口調整員、野村（教授）であった。

冒頭に、6月5日にUHS（University of Health Sciences, Cambodia）を訪問した際の結果を長官に報告したところ、長官から局長とUHSの学長が友人であること、教育省のスタッフを海外の大学に学位取得のために派遣したいと計画されている等の近況をご説明された。長官との面談で、教育省大臣から3つのレターを頂くことが即決された。1：教育省大臣へUHSによる保健テキストのクメール語翻訳と医学チェックの依頼（UHS）を行うレター、2：教育省大臣に当プロジェクト保健テキストを教育省認可副読本としていただくよう依頼するレター、3：保健テキストに局長が、UHSと香川大学への謝辞を掲載することの依頼を行うレターである。また、カンダルスタン郡でのプロジェクト作成の保健テキストを使っの教員への教育スキル研修においては、健康診断や歯科医師や看護師などの人材協力は、今後の教育省の教員養成との関連があるため、山口現地調整員との密な打ち合わせを進めたいことで了承された。また、山口現地調整員の教育省ボランティアについて、カンダルスタン郡教育事務所や教育省内事務力として歓迎するとの回答であった。本事業で作成している保健テキストは、教育省が副読本として認可するために英語版最新テキストを局長へ送付するよう要請があった。この時より、本プロジェクトで開発する保健テキストは、教育省認可副読本となった。今後は2019年に作成する「保健」教科書の内容を香川大学テキストから提供することで合意した。長官が多忙であったため、学校保健局へ場所を移して会議内容を確認した。局長から教員養成課程における保健分野教員のテキストについても協力が要請され、協力していくことで合意した。



図6. 教育省キム・セターー長官執務室訪問

V カンボジア保健科学大学 (University of Health Sciences (UHS), Cambodia) 訪問

2018年6月5日午前9時～12時 カンボジア保健科学大学へ訪問した (図7)。参加者は以下のとおりである。

University of Health Sciences 側参加者：

1. H. E. Prof. Saphonn Vonthanak, Rector, University of Health Sciences (UHS)
2. Asst. Prof. Seng Sopheap, Vice-Rector, University of Health Sciences (UHS)
3. Prof. Vorn Vutha, Vice-Dean, Faculty of Dentistry, UHS
4. Prof. Lay Vuthy, Vice-Dean, Faculty of Dentistry, UHS
5. Asst. Pof. Atann Ngy, Director, Technical School of Medical Care (TSMC) , UHS
6. Mrs. Preab Dary, Head of Nursing Unit, TSMC, UHS

Kagawa University 側参加者：

1. Prof. Masaaki Tokuda, MD, PhD, Vice-President, Director and Prof. International Office, KU
2. Prof. Hiroko Shimizu, PhD, Project Manager for JICA Partnership Program
3. Prof. Mika Nomura, PhD Prof. Faculty of Agriculture, KU
4. Ms. Mai Yamaguchi, Staff, Faculty of Medicine, KU

University of Health Sciencesは、医学部、薬学部、歯学部と医療技術学校の4部門からなる。2017年7月の表敬訪問に続き2回目の訪問となった。まずUHSの総長Prof. Saphonn Vonthanakから歓迎の挨拶があった。ついで徳田副学長から、答礼とJICA草の根事業内容の説明を行った。これまでの研修セミナーで、例えば専門用語の翻訳など色々問題点が明るみになってきたため保健テキストや本プロジェクトへの協力を依頼した。それ以外に香川大学医学部とUHSのMOU (Memorandum of Understanding) 締結に向けた今後の中長期的な交流のためのプロジェクトについても協議された。最後にギフト交換と写真撮影を行い総長、副総長は退出された。その後、歯学部、看護学科との交流について意見交換が行われ、後日看護学科を視察することとなった。



図7. カンボジア保健科学大学訪問

(A) 副総長と徳田副学長, (B) 集合写真, (C) UHS玄関前, (D) 徳田副学長による本事業の説明

6月7日(木)16:00-17:00に UHSのコメディカル学部 看護学科を訪問した(図8)。コメディカル学部は、助産学科、看護学科、理学療法学科、放射線学科がある。訪問時は、3年制正看護師教育課程2年次生の基礎看護学「与薬」の演習時間であった。2年制准看護師教育課程では、2年次生の基礎看護学「点滴の準備」の演習を見学した。その後、看護学科教員室、図書館を見学した。看護学科長から、学生同士の香川大学との交流を強く希望され、MOU後に実現してほしいとの強い要望であった。また、カンボジア国内には、看護学博士が1名のみであり、教員養成や教科書編纂が全く滞っていることが理解できた。学科長自身が修士号取得のために韓国に渡航したこと、また博士号を取りたいがそのためには外国に行かざるを得ず、家族との葛藤で苦しんでおられ、看護教員養成の課題を感じた。また、学科長は学生たちの日本の大学との交流を強く望んでおられ、香川大学への期待を述べられた。



図8. UHS看護学科視察

(A) 正看護師教育課程2年生との集合写真, (B) 基礎看護学「与薬」の演習,
(C) 准看護師教育課程 基礎看護学「点滴の準備」の演習, (D) 学科長

Ⅵ 総 括

今回のカンボジア訪問中に来日研修者のフォローアップのための来日後研修や、来日研修者による公開研修トライアルを行った。リーダー校では学校をきれいにしなければならないという認識が得られるようになった。また、本事業で作成した保健テキストがカンボジア教育省副読本として認定されることになったこと、その際問題となる専門用語のクメール語への翻訳はカンボジア保健科学大学の協力を得られることで合意した。本事業終了時には、現地に学校保健の大切さが普及することを期待する。また、香川大学医学部とカンボジア保健科学大学の協力体制も進展し、今後さらに強固なものとなっていくことも期待する。